

平成26年度西宮文学案内
秋期講座 第2回 作詞家を生み出す街 西宮
～岩谷時子、喜志邦三～

日時：2014年10月25日（土）14時～15時半
場所：夙川公民館 講堂
講師：河内 厚郎（文化プロデューサー）

河内

10月25日。今日は岩谷時子さんの命日です。

再来年が生誕100年。大作詞家で、夙川で育った方です。

皆さん、この年になって、バレリーナやピアニストになることはありません。趣味ではできますが。小説で芥川賞や直木賞を取るとなると、絶対に不可能とはいいいませんが、死にもの狂いにならないと。

辛うじて見込みがあるのは作詞家です。専門的な大学にいていなくても、いろんなジャンルの人が成功しています。俳句や短歌をやるのはすばらしいことですが、それだけで飯は食えません。しかし作詞なら儲かる可能性がある。

身近に実例がありまして、私が同人雑誌を編集している頃に、島田陽子さんという詩人の方が、詩人仲間では知られていたのです。もうなくなられて、夙川で育った方ですが。家では「お母さん、いつまで売れない詩を書いているの」とかいわれて、それで発奮されて、1970年の大阪万博のときに応募した「世界の国からこんにちは」という主題歌の歌詞が入选しまして、人生が変わりました。そういうことがあるんですね。

先年なくなられた高田直和さんは、朝日放送のプロデューサーで、西宮市文化振興財団の理事もしておられた。小林幸子の「おもいで酒」を作詞された方です。小林幸子は子供のときは天才歌手とか言われていたのですが、プロになってもなかなかヒット曲が出なかった。「おもいで酒」がヒットして有名になります。高田さんはその「おもいで酒」ぐらいで、小林幸子さんとは縁うすくなっていたのが、晩年にパチンコ屋でその曲が流れ始めた。すると、流れるたび、お金が入ってくる。作詞家にも何%か入ってくる。80過ぎてこんな金持ちになっていいのか、と言ってらした。

田中徳三という勝新の「悪名」とかを撮った映画監督は、映画が斜陽になって晩年は困窮されていたのですが、現役の最後のほうで必殺仕置き人シリーズを2,3本撮られているのです。これがパチンコ屋で映像が流れたのですね。そうするとお金が入ってくる。

私なんか、生の舞台とか一回きりの仕事ばかりなので、ちょっともお金が儲からない。やはり、コピーが効くような音源とか映像とかでヒットを飛ばすと儲かるわけです。

その最たるものが作詞家です。作曲家は音楽家ですので、音楽教育を受けてピアノが弾けるし、私は作詞家よりも作曲家のほうが威張っていると思っていましたが、歌謡曲はあくまでも作詞が優先、それに曲をつけるのですね。審査員をするようになってわかりまし

た。やはり詩を作るのは尊敬されると。

帰りに本屋で「公募ガイド」という月刊誌を見ていただきたい。いろんな募集が出ています。不況のときでも景気のよい業界があります。製薬業では、アトピー短歌大募集とか、花粉症エッセイ募集とか、葬儀屋さんの募った俳句もよく電車の中で見かけます。サントリーミステリー大賞の2000万円とか、見込みないものは狙わないで、5万円とか10万円とか、もしかしたらいけるかもというところを狙っていただきたい。

千里ニュータウンなどは子供が減ってきて、2つの学校が合併して校歌を作り直さないといけない。校章なども、デザイナーにはアルバイトのチャンスです。

昔は薄田泣菫とか竹中郁とか富田砕花とか一流の詩人が校歌を書きましたが。このほど私の友人のミステリー作家、有栖川有栖が、校歌の作詞をつくりました。昔、横溝正史とか江戸川乱歩に校歌を依頼するなどなかった。もしかしたら20年後、30年後、歌詞のなかに謎解きがあったとわかるのでは、とか冗談を言っていますが、ミステリー作家にも注文が来る時代となりました。

この間の日曜日に、宝塚歌謡選手権を逆瀬川のアピオホールでやりました。正司泰一郎・元市長が「ベルサイユのばら」を歌い、予選を通過しました。奥さんが宝塚歌劇団の出身らしい。宝塚の歌謡選手権にはシャンソン部門があるのです。宝塚は日本シャンソン発祥の街。昭和2年、1927年に「モンパリー」がヒットしたときに初めてシャンソンが紹介された。だから日本のシャンソンは宝塚から始まったというわけです。

私が審査員をつとめたのですが。シャンソンというのはマイナーなジャンルに見えて、CDの売上げでもわずかな%ですが、習いに行く人が多く、カルチャーセンターでの需要が高い。カラオケではあまり歌われませんが。年を取ってもやれるというのが人気の理由です。

シャンソンというのはフランスの大衆歌謡ですが、実はシャンソン歌手というのはフランスにはおりません。シャンソンというのはフランス語で「歌」。「歌の歌手」なんて、ありえない。シャンソンを歌う歌手というのは日本人だけ。カンツォーネもイタリア語で「歌」という意味で、シャンソン歌手というのが日本に何百人、カンツォーネ歌手も何十人いる。ポルトガルのファドを歌う人もいて、日本は世界の芸能テーマパークみたいになっています。ブラジルではボサノバの歌手が今ほとんどいなくなっているのに、日本ではボサノバのプロの歌手がいる。何しろ、真似が好きで、ミーハーで、器用で、それなりに様になって歌っている。いろんなジャンルがあるという面白い国で、「枯葉」とか「パリの空の下」なんか今ではフランスでも知らない人が多いのではないか。もしかしたら歌っているのは日本だけと違いますか。7月14日のパリ祭、フランス革命の記念日を祝う国は、フランスと日本、それからカナダのフランス人くらいのもので、なぜ日本人が祝うのかわからない。

シャンソンはフランスの大衆歌謡ですから、フランス人に合った歌い方をしているわけです。まず、フランス人は声量に乏しい。イタリア人のように朗々と声が出ない。だから語りかけるように歌う。リズム感もラテン系としてはイマイチだと思います。ダンスも本

当はうまいことないにしても、そこは愛のささやきで補う。会話が発達して洗練されている。それから、エゴイストが多いので、ベルリンフィルのような合奏は向かない。

こうした短所を全部長所にきりかえているのがシャンソンで。シャンソンの伴奏をするピアニストはギャラが高い。歌手ごとにキーの高さを変えて伴奏していくからです。クラシックのように無理に高い声を出さなくていい。低い声しか出ないなら低い声を使っていいわけですね。場合によったら語りに切り変えてもいい箇所がある。その人の雰囲気合った歌いかたをする。つまりフランス人の個人主義や欠点を文学的な魅力に切り替えているのがシャンソンなわけです。人と合わすことができない。声あまり出ない。リズムが取れない。みな老人の特徴でもあります。これらをプラスに活かしたジャンルがシャンソンですから、年を取ってやるのにふさわしい。老人にパンチの効いた音楽をやらせても体が動かない。その代わり、人生の味わいやドラマ性が要求される。演技力も必要になるわけです。

シャンソンは宝塚から紹介されましたが、美輪明宏などは、宝塚から入ったのがある意味で不幸だと言っています。本当のフランスのシャンソンというのは、じっくりと文学性豊かに聞かせるものなのに、宝塚のレビューのせいで華やかになりすぎた。もっと人生の苦みというか、例えば場末の売春婦の歌でも、最後の 3 番の歌詞で恋人が戦死したとわかる。アメリカのフォークソングなんかは観念的に戦争がよくないと歌うのですが、シャンソンにはドラマ性が要求される。最後に戦争の悲しみがこみ上げてくるところがにくいわけで、美輪明宏はそういう歌を歌っていますし、フランスのシャンソンを考えるならそうなるわけですが、日本人が作り出した日本の芸能として今日はお話したいのです。

岩谷時子の経歴を見ていただきますと、浜脇小学校、途中から安井小学校、市立西宮女学校、神戸女学院。「思い出の街」というグラフ西宮に載せたエッセイには、夙川あたりが自分の少女時代の原風景だと書いています。戦前のえべっさんには逆さ門松があったとかも書いてあります。神戸女学院の英文科に進み、宝塚歌劇のファンだったので、宝塚の出版部に入りまして、今もよく阪急の駅で売っている「歌劇」という雑誌の編集長をしました。

越路吹雪より年上、先輩になります。越路吹雪のことは覚えておられる方がまだ多いかと思いますが、34年前に亡くなっています。今生きていたら90歳くらい。シャンソンの女王といわれた大スターで、彼女のマネージャーになったのです。

越路吹雪は男役の大スターになったのに、愛の歌が歌えないと言い出した。自分は女なので、女の気持ちで愛の歌を歌いたい。男役で歌うと作り物になってしまうので真実味が出ないと言い出して、せっかく大スターになったのに退団してしまう。

歌劇の大スターは世間知らずで、電車の切符も買ったことがない。東京公演から帰ると伊丹空港から荷物をだれが運んでとか、猫の世話とかも後援会がやるらしいので、退団するまで世間知らずなんです。越路吹雪はその典型だったので、退団後のお目付け役ということで岩谷時子がマネージャー役を頼まれたらしいですね。死ぬまでマネージャー代を一銭

も受取らなかったということです。もともとお金に困ってなかったのかも知れませんが、作詞家として成功したからそういう心配もなかったのです。

発端は越路吹雪がサインを作ってほしいと頼んだのです。越路吹雪という名は画数が多い。岩谷時子はひらがなを使ったサインを作ってあげた。亡くなるまで岩谷時子を作ったサインを使っていたのですが、そういったことが縁になって退団した頃からマネージャーをしていました。

昭和26、7年、ちょうど日本が独立する頃。東京では日劇、大阪では大劇、こういう劇場で歌謡カーニバルみたいな公演が行われて、ロカビリーがあり、ジャズもシャンソンもあり、戦後、ポピュラー音楽が解放されたなかで彼女もデビューするんですが、当初は評判が悪くて、進駐軍に迎合したのか知りませんが、英語で歌ったら余りに下手だと書かれたのです。聞いてもらえない。これは越路吹雪にしてみたら当然だったらしく、不器用で正直な人だったので、英語は自国のことばでないから気持ちが入らない。下手なのは当たり前。日本語で歌いたい、日本語で歌うとなると訳詩が必要だ。誰かに訳してもらわなければいけない。

日劇のトリで歌う予定だった歌手が突然出られなくなり、まだ歌手として新人だった越路吹雪にまわってきた。このとき一晩でエディットピアフの「愛の賛歌」という歌を覚えて歌わなければならなくなる、これは原詩を見ると凄い歌なんです。エディットピアフはフランスで一番有名な歌手ですが、恋人のボクサーが飛行機事故で亡くなったときの歌で、あの世で結ばれたいと思って歌っていますから、恋のためには祖国も捨てるし友人も裏切るし、大地が崩壊してもかまわないと、凄い絶唱なのですが、宝塚で甘ったるい歌ばかり歌っていた歌手が、なかなかその歌詞では歌えないということで、岩谷時子に訳詞が回ってきた。岩谷時子は夢見る少女でしたので、ロマンチックな、乙女チックな、完全に作り変えた歌詞にして、これが非常に好評だった。それまで取ってつけたようなシャンソンが多かった中で自然に聞けたと。それでシャンソンの道に入っていく。

私が子供のとき、紅白歌合戦は、だいたい東京宝塚劇場でやっていました。NHKホールが渋谷にできるまでは東京宝塚や新宿コマが多かった。シャンソン歌手も昔はよく出ていたのですよ。男なら芦野宏、高英男、旗照夫、女性では越路吹雪、岸洋子、そのちょっと前では石井好子、中原美紗緒……。越路吹雪が一番よく出ていました。途中から出なくなりましたが。一番流行した「愛の賛歌」は、今から20年ほど前に日本人女性宇宙飛行士第1号の向井千秋さんが宇宙から流しました。CDを宇宙船にもって行って話題になったものです。

それでは越路吹雪の「愛の賛歌」をかけていただきます。 ♪「愛の賛歌」

有難うございました。大変有名な歌で、越路吹雪以外の歌手も歌っています。フランスのシャンソンにこだわる方はもっと原詩に近い詩で歌っています。

宝塚歌劇の主題曲は帰りに口ずさめるようなメロディが多い。これは舞台芸能では大切なことです。劇団四季なんかも、昔は難しい劇ばかりをやっていましたが、ミュージカル

をやるようになって身近な劇団になりました。

私は、ほんの短い期間、サラリーマンだったことがありまして、日本生命の東京総局の人事部勤務となり、勤務先の日生ビルは、日比谷公園の前、東京宝塚劇場が背中合わせにありました。1階から6階までが日生劇場で、7階に勤務していました。昭和50年過ぎの頃で、保険会社の内勤は終わる時間が早いから、5時半開演のミュージカルの席が空いているからと、チケットが回ってくる。劇団四季もまだその頃は人気がなかった。

その日生劇場が、朝、出勤するとき、前売り券の売り場に行列のできるのが、越路吹雪のリサイタルで、ものすごい人気でした。チケット争奪戦で、1週間ファンが寝袋で並ぶといった状態でした。その越路吹雪の後ろで踊って歌っていたのが劇団四季でした。越路吹雪はシャンソンで1ヶ月満員にする走りでした。

地下に「アクトレス」というレストランがありまして、「女優」という意味ですが、日生の社員も、日生劇場のスタッフも行く。横を見ると栗原小巻がいたりしました。岩谷さんは遠目に見たことがある程度です。

越路吹雪という人は、自分の歌が下手だと思い込んでいますから、リサイタルになったら震えが止まらなくて。岩谷時子が「虎」と手のひらに書いて、あなたは虎になるんだと言うと舞台に出る。ちょっと大げさな話ですが、幕が閉じたら担架で運ぶんです。本当に倒れてはいないんでしょうが、全力で歌っていますので、徹底したいのでしょう。大御所になってもそんな感じでした。

岸洋子なんかは、出の寸前まで楽屋でニコニコ対応してくれる。自分でうまいと思っていますし、実際うまかった。越路吹雪という人は声量が少ないからか、マイクの使い方や研究している。宝塚で同期の深緑夏代の方がはるかに歌唱力があるといわれました。越路吹雪という人はいろんな欠点を指摘されるんですが、なんとかしてあげなくてはという一流のスタッフが回りにつくんですね。人間的魅力があったということです。越路吹雪の周りにいたスタッフが美空ひばりの周りにいたら、美空ひばりは世界一の歌手になったと思います。ひばりは回りが悪かったでしょ。美空ひばりは裏声なんかも自由自在に出ましたね。

ちなみに私が一番好きな歌手はちあきなおみですが、ちあきなおみは裏声が出ないから、シャンソンみたいな語りかけるような歌い方を作ったのですが。美空ひばりはどんな歌い方もできる。風邪を引いていても、きれいな声が出る。

天は2物を与えずで、才能ある人は環境が悪い。越路吹雪という人は、岩谷時子に始まって、結婚した内藤法美さんに至るまで、何とかしてあげたいという人ばかり集まった。

これはピアフもそうでした。ピアフは実力ありましたが、ジャン・コクトーとか一流の人々が周りを固め、ピアフは問題ばかり起こすのですけれども、周りがすばらしい歌を提供して立ち直っていく。人間的な吸引力があったのです。

越路吹雪が代役で歌うことになった「愛の賛歌」の訳詞を急遽作ったとき、一晩寝ずに作った。朝方、そのロマンチックな歌詞を見て越路吹雪が笑った。なぜ笑っているのと聞

いたら、あなた何も知らないからこんな歌詞がつかれるのねと。岩谷さんは男性の話を聞きませんから。あくまで夢見る文学少女としてスイートな歌詞を作った。越路吹雪はいろいろと男性遍歴がありました。

でも、いかにも上品な岩谷時子が「ベッドでたばこを吸わないで」の歌詞を作ったのには驚きました。

越路吹雪に次いで有名なシャンソン歌手の岸洋子は、「恋心」とか「想いでソレンツァラ」とか、エンリコマシアスの歌をよく歌いましたが、いずみたく作曲で、岩谷時子が訳詩でなく作詞で、フランスのシャンソンでなく日本の歌として成功した。「夜明けのうた」をどうぞ。 ♪「夜明けのうた」

「希望」という歌も日本の歌としてヒットしました。ヒット曲をもっている歌手というのは幸せですね。

二人とも 50 歳代の早死にです。越路吹雪は癌、岸洋子は肺炎でした。

次に、島倉千代子さんが、タイガースのホームラン王の藤本勝巳さんと結婚して甲子園に住まれた、その間のヒット曲をさがしてみました。西宮に移ってくる前には「東京だよおっかさん」とか「この世の花」とか有名なヒット曲がいっぱいあるんですが、西宮時代のヒット曲は「ほんきかしら」という軽快な歌で、岩谷時子作詞です。何も西宮を意識した歌ではないのですが、なかなかいい歌で、軽く歌っているけど色気のある歌です。それではお願いします。 ♪「ほんきかしら」

昭和 30～40 年代は、ナイトクラブで、ラテンがよく歌われていましたね。歌謡界も、ロスプリモスとか、スペイン語を使ったような名前の歌手が多かった。ジャズかラテンを歌っている歌手が歌謡曲に転向してヒットを飛ばすというケースがよくありました。

「ほんきかしら」は、しゃれた大人の雰囲気、かわいらしい歌で、ヒットしました。これが西宮時代の歌で、島倉さんが西宮に住んだ当時、朝日放送の「てなもんや三度笠」という人気番組があり、関西に住んでいるものだからよく出演していました。はじめに藤田まことと白木みのるが出て来て、まず歌を歌う。その後、本物の歌手が出て来て歌うんですね。島倉さんが当時よく出ていまして、アイヌの娘という役で、それを藤田まことのあんかけの時次郎が追いかける、その中でいつも藤本さんのことをひやかして言うんですよ。本当は夫婦仲悪くなっていたか知れないのですが。

「ウナセラディ東京」を最初に歌ったのは、ザ・ピーナッツです。いろんな人が歌っていて、岸洋子も歌いました。園まりの「逢いたくて逢いたくて」、加山雄三の「君といつまでも」、ピンキーとキラーズの「恋の季節」、「男の子女の子」の郷ひろみ・・・その時々の大ヒット曲ばかりで、どれも岩谷さんの作詞です。凄い収入だと思います。カラオケでも歌われていますし、シャンソンでも歌われていますから。

訳詩では「ろくでなし」も定番ですね。「マイウェイ」とか「百万本のバラ」。ミュージカルの「王様と私」や「ウェストサイド物語」も舞台でやるときは岩谷さんの訳詩で再演を重ねています。

それに、岩谷さんは独身でしたから子供もいない。岩谷財団が出来て、賞も設けられて、辻井さんという目の不自由なピアニストの方が最初に選ばれた。何とか少し西宮にもお金を落としてもらいたいと言っているうちに亡くなってしまった。97歳でした。

「ウナセラディ東京」は、西田佐知子も歌っています。彼女は引退して長いのですが。「菊正宗」のコマーシャルの歌で声だけ出てくる。かつてマーキュリーレコードというレコード会社が西宮にあり、そこで関西出身の西田さんは仕事しておられたこともある。マーキュリーレコードというのは、首都圏以外では唯一メジャーなレコード会社でした。それでは西田佐知子の「ウナセラディ東京」を聞いていただきます。 ♪「ウナセラディ東京」

安保闘争の頃、昭和 35 年に「アカシヤの雨に打たれて」が大ヒットして、「コーヒールンバ」とか、西田佐和子にはたくさんいい曲がありました。私の好きな歌手はみんな引退してしまうんです。ちあきなおみとか。西田佐知子とか。非常に残念ですが。みんな生きているんですけどね。

私は大学生のとき、好きな歌手がちあきなおみ、中学高校校のときは西田佐知子、小学校のとき、まわりはザ・ピーナツとか弘田三枝子とか、でも私だけ松尾和子のファンでした。

子供のときから歌が好きで漠然と聞いていたのですが。子供だからウソ聞きしているんです。五木ひろしの「横浜たそがれ」という歌があって、これを作った山口洋子という作詞家が亡くなりましたけど、「横浜たそがれ ホテルの小部屋」という出だしで始まるのですが、私の頭の中に、小さな部屋、小部屋という概念がなかったのですね。歌舞伎や映画では大部屋さんとかいうけど。「横浜たそがれ ホテルの 神戸や」と思いこんでいたのです。横浜と神戸を比較して、横浜はたそがれがいいが、ホテルは神戸やでと、でもここだけ関西弁を使って変な歌やなあと思っていました。のちにカラオケの映像で文字を見て愕然とします。

松尾和子の「再会」という歌は、最後に彼氏が監獄にいるとわかるんですけど。初めて歌詞のすごさというのがわかって、子供ながらに歌詞開眼というか。

ずっと大人の歌ばかりでしたので、私も初めて聞くのですが、宮本さんに探し求めていただいた、岩谷さんの母校、市立西宮高校の校歌、じゃない、学生歌のようなのが、岩谷時子作詞、いずみたく作曲という豪華版なので、皆様もご存知ない方が多いと思いますので、今から聞いてみたいと思います。それではお願いします。 ♪「市立西宮高校学生歌」

当たり前ですが、夜のムードではない健全な歌で、今初めて聞きましたが、なかなかいい歌だと思います。市西の卒業生は知っていると聞きました。

校歌も有名な人が作ると騒がれます。西宮では薄田泣菫とか竹中郁とかいろんな著名人が校歌を作っているの、そういうコンサートをやってみたら面白いのではないかと思います。

年下の越路吹雪が先に亡くなって岩谷時子はがっくり来るのですが、越路吹雪は癌を患って、岩谷時子が何とかもう一度舞台に立たせようと睡眠薬やたばこを取り上げようとす

るのに、ご亭主のほう有余り厳しくなかったのか、岩谷さんとけんかになったと週刊誌に報じられて、越路吹雪をめぐる夫とマネージャーの軋轢とかマスコミをにぎわしたことがありました。

その後、ミュージカルの訳詩も手がけるようになります。「ミス・サイゴン」というベトナム戦争を題材にしたミュージカルをこの間もフェステバルホールでやっていましたが、岩谷さんが訳詩を手がけたときに、主演者の本田美奈子さんという歌手と仲良くなり、越路の再来と思って大事にしたのですが、彼女も病魔に倒れて早く亡くなる。たまたま岩谷時子が足を怪我して同じ病院に入院し、ボイスレコーダーを通して当時無菌室に入っていた本田美奈子を激励した。これはテレビドラマにもなりました。岩谷時子自身もテレビドラマになり、竹下景子が演じました。亡くなってまだ1年、2年ですから。これからだと思います。岩谷時子さんはお嬢さん育ちでしたが、しかしそこには色々なドラマがあったと思います。これからいろいろ伝記が出てくるとと思います。というところで岩谷さんの話を終わります。

次は、喜志邦三、今日の資料の中に、西宮市が出している西宮文学回廊をそのままコピーしました。西宮ゆかりの文学者をネットでも紹介しているのですが、これから聞かせていただきます「春の歌」は、国民歌謡として発表されたもので、西宮北口駅とアクタ西宮をつなぐデッキのところに歌碑があります。もっと見えやすいように置いて欲しい。一度注目して見ていただきたい。

あのあたりに昔、古い市場がありました。それをイメージして作ったといわれる歌詞の一部もあるようです。「春の歌」の2番目の歌詞「青い野菜も市場に着いて～」は、西宮北口にあった市場のイメージかもしれません。すっかり風景が変わってしまっていますが、歌が残ってよかったと思います。

貴志さんの出身は堺ですが、西宮に住んだ詩人であり作詞家です。もず昌平さんが私淑したのか本当の門人なのか知りませんが、関西の詩人の先輩として尊敬している人は多い。新聞記者を勤めた後、大正14年から神戸女学院で教え、三木露風の「未来」に加わる。三木露風は播州龍野の出身で、シンボリックな詩を書いた人ですが、地元では「赤とんぼ」があまりにも有名で、龍野は「赤とんぼ」で町おこしをしています。

貴志さんは昭和14年にNHKの放送文芸賞を受賞し、戦前から有名でした。「踊り子」は三浦洸一が歌ってヒットした曲ですが、伊豆の踊り子のことですね。1972年の西宮市民文化賞を受賞しています。この曲を石川さゆりが歌っているのを聞くのは初めてです。それではお願い致します。

♪「踊り子」

西宮北口の市場のはずれに住んだ津高和一という有名な画家が震災で奥さんと一緒に亡くなりました。たくさん飼っていた猫はもらわれていき、写真集も出しましたが、作品が残ることで思い出が残る。たくさんの思い出を持っている町が、作詞家を生み出す。

ご承知のように今から50年前に西宮市は「文教住宅都市」になりました。石油コンビナ

ートを海岸につくると当時の田島市長が言い出して、市議会もOKを出し（議会もあてになりません）、市民の間で猛反対がおこって、普段おとなしい関学の先生方も環境を破壊すると抗議し、地元の造り酒屋も宮水が出なくなりえらいことになる。主産業ですからもったもな抗議で、それで市長が辰馬さんに代わって、もう 2 度とこういうことがないように「文教住宅都市宣言」した。四日市には悪いけれども、西宮にコンビナートが来ていたら、「西宮ぜんそく」ということになっていたかも知れない。

その文教住宅都市宣言から 50 年ということで最近も西宮市は催し物をやっていましたが、文教住宅都市西宮の歌の作詞は喜志邦三、作曲は鎌田廉平。鎌田廉平は、私の兄が大社小学校に通っていたときの音楽の先生でした。西宮市内であちこち音楽の先生をされた方ですね。こういう歌も喜志さんが作っているということは、西宮市の文化人として認められていたからです。堺市出身ですけれども西宮市をふるさとと思いつかれたエッセイを中にいれてあるので、読んでおいていただければと思います。それでは我々のアイデンティティである「文教住宅都市西宮の歌」を、案外みんな知らないなので、聞かせていただきましょう。お願いします。 ♪「文教住宅都市の歌」

普段歌うことはあんまりないんですが、こういう歌はくせがない、50 年前に出来た歌です。

次にご紹介する歌は、私の甲陽中学高校時代、6 年間同級生だった阿部孝夫君。夙川の雲井町か殿山町に家があり、ええしの子だった。ペンネームが麻生香太郎という作詞家になり、ヒットした曲は森進一の「新宿港町」。あとは小柳ルミ子の「一雨降れば」とか、NHK 朝ドラ「さくら」の主題歌とか。

少年時代から芸能界が好きだったので、今はプロデューサーのようなこともしています。大学生のときに作詞家になり、ラブラブショーという番組に出たり、勉強もよく出来てハンサムでした。妹さんが朝日放送のアナウンサーになり、「ヤングリクエスト」を担当していました。その主題曲は奥村チヨさんが歌っていましたが、奥村チヨさんは夙川学院の卒業生です。三波春夫さんの息子さんの三波豊和のデビュー曲が、麻生香太郎の「あゝ甲子園」で、麻生香太郎が野球好きだというのは聞いていないけど、注文があったから書いたのでしょう。作詞・麻生香太郎、作曲・三木たかし、聞いて見ましょう。お願いします。 ♪「あゝ甲子園」

くせがなくのびやかに歌っています。この後、何曲か出しましたが、歌手としてはパツとせず、テレビショッピングに出たりして、お金に困っていないのでしょうね。

次に校歌を聴いてみたいと思って、大物を選んでみました。薄田泣菫は作詞家というより大詩人ですね。明治以来の 10 人を選んだら入る詩人だと思います。

新体詩が生まれたのが明治 20 年代で、最初のスターが土井晩翠と島崎藤村、「春高樓の～」とか「まだあげ染めし前髪の～」。明治 30 年代は薄田泣菫と蒲原有明が 2 大詩人。明治 40 年代が北原白秋と三木露風。大正に口語の詩がうまれて萩原朔太郎や佐藤春夫が出てくる。泣菫は明治 30 年代から 40 年代にかけて、日本で一番有名な詩人でした。若くして

成功し、毎日新聞に招かれて学芸部長になり、恵まれた人生でしたが、40 歳くらいからパーキンソン病にかかり、体が不自由になりましたので、分銅町の自宅で随筆家になりました。「茶話」は日本の新聞コラムの最高傑作とされています。今も屋敷の板塀だけ残っています。山手幹線のちょっと南側ですが。雑草園と本人が名前をつけました。

安井小学校は校区に住んでいるもっとも有名な詩人、泣菫に校歌をお願いしたわけですね。それから夙川小学校の校歌も。今日は安井小学校の校歌をかけてみます。小松左京さんが大社小学校から安井小学校に転校されたんですけど、大社小学校の校歌は全然記憶にない、安井小学校の校歌はものすごく覚えていると言っていました。それでは、薄田泣菫作詞の安井小学校の校歌を聞いていただきます。 ♪「安井小学校校歌」

安井小学校の歌も夙川小学校の歌も、昔の歌なので、最後のほうに愛国調が出てきます。このごろは祖国とかは歌いませんね。

昭和 20 年に亡くなっています。戦争が終わるころに。故郷は今の倉敷市で、そこへ疎開したような形になるんですが、尿毒症で亡くなっています。

倉敷では薄田泣菫の詩の朗読を学校教育に取り入れて非常に大事にしています。西宮には 30 数年住んだのですから、泣菫の詩を一つくらい朗読させたらどうか。理屈抜きに覚えてしまうと、ことばの感覚が豊かになります。

一世を風靡した詩人で、ジャーナリストとしても成功しました。明治 10 年生まれですの、谷崎潤一郎とかと比べても先輩になります。今、夏目漱石の「こころ」を朝日新聞が 100 年ぶりに再連載していますけど、大阪朝日とか大阪毎日に原稿が載るということが文学者としての成功の証でした、それを仕切っていた編集者でもあったので、芥川や志賀直哉が、自分の作品をとりあげてほしいという、泣菫あての手紙が、毎日新聞が新社屋に移るとき見つかりました。泣菫の資料は倉敷が大事にしていますが、西宮も一枚かんだらどうか。随筆、エッセイ部門の「薄田泣菫賞」を出してみたらどうかと思うんです。

心の滋養が沢山ある街というのは、いろんな才能が育ちやすい。西宮の場合は和洋折衷というのか、西洋音楽が早くから入っていますし、宝塚も近くにあり、神戸女学院や武庫川女子の音楽科もあり、ラジオ関西の電話リクエストなんかがポピュラー音楽を中心にとりあげましたので、村上春樹のように、それを聞いて育ったからポピュラー音楽に対する感性が早くから培われたという例もあります。それから、今よりもっと自然が豊かで、山も海も川も豊かで、それでいて都会的な環境に隣接しているという大変恵まれたところでした。しかも文化人が沢山住んでいるという、言葉を培うのには理想的な環境にあったと思います。

高齢化社会に備えて西宮に作詞家の学校が出来ないかなと思っています。場所はもう決めているんです。アサヒビールの工場跡地につくって欲しい。消防署や病院の移転が悪いとはいいいませんが、あれだけの敷地ですから、もう少しロマンが欲しい、J R 西宮駅に東口を作ればすぐです。

J R 茨木駅の横に立命館大学が入って来た。東海道線の沿線で快速の停まる駅に大学を

つくれば、かなり遠くから、赤穂や長浜あたりからも通える。西宮も茨木と似た条件ですよ、快速が停まる駅に大学のひとつくらいもって来れないか。例えばアートマネジメント学科とか文化的な学科を持ってくるとか。近畿大学なんか東大阪で成功しているわけですから、阪神間にもキャンパスをつくれば成功するんじゃないか。

夢は言いつづける事が大事で、皆さん共鳴していただければ、とりあえずやれるところからやっていけばいい。ネット社会ですので、何か一つ当たれば、パッと状況は変わってきます。

健全な歌が続きましたので、もう一度、夜のムードに戻りたいと思います。岩谷時子訳詩で、S. アダモ作詞・作曲「サン・トロ・マミー」、越路吹雪でどうぞ。

♪「サン・トロ・マミー」

ありがとうございました。